

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 ゼ | F08 - 01 |
| | 平14.205集 |

自己実現的態度を育てる生徒指導プログラムの開発 - PDCAサイクルの活動の中に教育相談の技法を用いて -

長期研修員 橋本 春昭
指導主事 武藤 榮一

《研究の概要》

本研究は、グループの機能を利用して自己理解を深めたり、自分のよさを高めたりする活動を積み重ねていくことによって、自己実現的態度を児童に育てていくための生徒指導プログラムを開発するものである。そのための手だてとして、PDCAサイクルの活動の中に構成的グループ・エンカウンターと解決志向アプローチを用いた。授業実践により、このプログラムが児童の自己実現的態度を高めるのに有効であることが実証された。

【キーワード：生徒指導 小学校 教育相談 自己実現 自己理解 自己評価】

主題設定の理由

平成13年度、全国で約13万9千人の小・中学生が「不登校」といわれる状況で学校を欠席した。現在、本県でも不登校対策が緊急の教育課題となっている。また、中学生による学校内外での暴力事件も報道されている。これらの要因は様々だろうが、子ども同士のかかわりの希薄さ、特に、相互に支え合い援助し合う関係が薄くなってきていることや、自分はどうなりたいたのかという目標を持ち、努力していこうとする態度が十分に育っていないことが考えられる。

中学校進学を控えた小学校6年生が、互いの人間関係を深めながら自分の興味・関心のあることに情熱を持って取り組み、自己実現を図っていく態度を育てていくことは、今後の進路を考える上で、重要なことであると考え。そこで、子どもが自分自身を見つめ、自分のよさや可能性をさらに向上させるための目標を自ら設定（Plan）、実施（Do）、評価（Check）、改善（Action）していくという活動に、教育相談の技法を取り入れた生徒指導プログラムを開発しようと考えた。

本プログラムは、自己理解を深めながら自分のよさや可能性に気づき、目標を立てる部分と、それを実行し、評価・改善していく部分とから構成されている。自己理解を深めていく場面では、主に構成的グループ・エンカウンターを用いる。目標を設定したり、一週間毎に振り返ったりする場面では、解決志向アプローチを用いて、目標達成へのイメージづくりと自己評価の向上を図っていく。なお、活動を同一のグループで行うことによって、相互に援助しながら主体的に取り組んでいけるようにした。

これらの活動を通して、自分のよさを生かし、自己を実現するために主体的に取り組んでいこうとする態度を育成できると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

PDCAサイクルでの活動の中に、教育相談の技法を取り入れた自己実現的態度を養う小学校高学年用生徒指導プログラムを作成する。

研究の内容と方法

1 本プログラムの基本的な考え方

(1) プログラムの構想

プログラム（『自分向上プロジェクト』と呼ぶ）の構想にあたっては、『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』ベネッセ文教総研（2002）の「自己評価を取り入れた子どもの学習サイクルモデル」を参考にした。全体の流れは、図1に示す。1サイクルの活動の中で前半は自己理解を中心とし、後半は自己実現的態度の養成に重きを置く。最後に、新たな計画へ向けてのアクションを起こして終了となる。



図1 本プログラムの構想図（流れ）

(2) 自己実現的態度について

カウンセリング辞典では、自己実現を「個人が自己の内に潜在している可能性を最大限に開発し、実現して生きること」と定義している。そこで、本プログラムでは、子どもがなりたいたい自分に近づくために、自分のよさや可能性を伸ばして精いっぱい主体的に取り組む態度を自己実現的態度ととらえる。具体的な求める子ども像を表1に示した。

主体的に行動するためには、まず自己を見つめ直し、今の自分は何をなすべきかという目的意識を明確にすることが必要である。次に、そのための解決策を自分で考え、最良の方法を判断して実行に移す。さらに、その結果を評価し、次の課題へとつなげていく。この過程は、企業が成果を上げている経営手法「目標による管理」のPDCAサイクルと同じであり、本プログラムはこの流れで活動を進めていく。

表1 求める子ども像

| ＜自己実現に向けて主体的に取り組む子＞ | |
|---------------------|--|
| 【自己の理解】 | 積極的に友達と交流して、自分のよさやものの見方・考え方に気付く。 |
| 【目標と解決策の設定】 | 自分を向上させる目標を自ら決定し、それに近づくための実現可能な行動を考えられる。 |
| 【解決に向けての実行】 | 自分で決めたことをやり通そうとする。 |
| 【評価と改善】 | 実行したことを振り返り、できたことを確認し、次にやるべきことを考え、行動につづせる。 |

(3) 自己指導能力とのかかわり

子どもたち一人一人が人格のよりよき発達を目指し、豊かな自己実現を図っていくために、

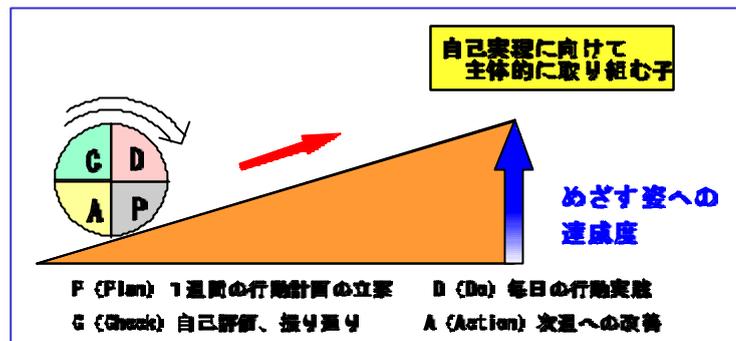
自らを指導していく能力を自己指導能力ととらえる。生徒指導資料第20集では、「自己指導能力」には、自己をありのままに認め（自己受容）、自己に対する洞察を深めること（自己理解）、これらを基盤に自ら追求しつつある目標を確立し、また明確化していくこと、そして、その目標の達成のため、自発的、自律的に自らの行動を決断し、責任をもって実行することが含まれる」としている。したがって、本プログラムでも、子どもがまず自己受容、自己理解を深め、その上に立って目標の達成に向けて努力できるようにする。検証にあたっては、「自己受容」と「自己実現的態度」を実践の前後で調査するとともに、「自己理解」については関連の授業ごとに自己評価を試みていく。

(4) PDCAサイクルについて

本プログラムには、次の3つのPDCAサイクルがある。

全体の大きなPDCAサイクル（図1）

本プログラム全体を大きな1サイクルと捉えて、自己実現的態度を養い、今後の生活にいかしていく。



1週間の小さなPDCAサイクル（図2） 図2 1週間のサイクルのイメージ図（谷津1995の図参考）

1週間ごとに目標を立て、具体

的な解決策を実行し、評価・改善していく活動を積み重ねる。プロジェクトカードを使いながら、4週間実践する。

授業の中のPDCAサイクル（7頁の授業実践を参照）

本プログラムでは、学級活動の時間を4時間使う。この授業展開もPDCAサイクルで実施する。

2 教育相談的なかかわり

(1) 構成的グループ・エンカウンター（S G E）

構成的グループ・エンカウンター（以下S G Eと記す）は、各種のエクササイズを遂行しながら、心と心のふれあいを深め、自己の成長を図ろうとするグループ体験である。自己理解や他者理解を促し、信頼感や自尊感情を高めるために用いるとともに、「自分向上プロジェクト」の目標設定につなげていくように活用する。

本プログラムでは、「いいとこさがし」と「なりたい自分ベスト5」を主なエクササイズとして行う。また、各時間の導入には、関連したショートエクササイズを行う。エクササイズの実施に当たっては、自分自身の気づきを大切に扱う。グループのメンバーからは言葉だけでなく、メモ書きの形で本人に伝える場面を多く設け、自己理解・他者理解を図っていく。

(2) 解決志向アプローチ（S F A）

解決志向アプローチ（以下S F Aと記す）は、ディ・シェイザー、キム・バーグらによって開発されたソリューション・フォーカスト・セラピーを理論的基盤として、臨床的に発展させた実践型心理療法である（ディヤング、バーグ1998）。特徴は、原因ではなく解決に焦点を合わせるということにある。問題をもった人が、最終的にどうなりたのかという解決後の像を明確にし、それに近づくことを一つの目的としている（富永、山中1999）。

本プログラムでは、なりたい自分の像を明確にし、それに近づいていくために使用する。計画した解決策を「あまりできなかった」と否定的にみるのではなく、「一日だけできた」「一回だけできた」というように、できたことを肯定的に考えられるようにする。それによって、なりたい自分の姿を10点満点としたときの、現状の自分は何点になるかというスケールリングの数値が上がってくると考える。すなわち、自己評価が高まることになる。それをグラフに表す

ことで、少しずつなりたい自分に近づいている様子を視覚的にもとらえさせる。

(3) グループの機能

互いに励まし合い評価し合うなど、互いをより高めていく集団の力を利用するために、同一のグループでプログラムを実施する。これは、グループの持つプラス機能として、山本(2001)が考える受容作用や愛他性の機能と一致している。さらに、個人でプロジェクトを実施すると、続けることが難しい子どももいるであろう。途中でマンネリ化して効果が薄れてしまう子どももいるであろう。それに対して、グループなら互いを支え合い、励まし合って目標達成に向けて最後まで実行していけると考えたからである。

3 『自分向上プロジェクト』の具体的なプログラム

本プログラムの展開は、5頁の表2に示す通りである。まず、自己理解を深め、自分のよさを生かしたなりたい自分の姿をイメージする。次に、具体的な行動(解決策)を計画し(Plan)、作成した計画をもとに4週間実施する。その間、1週間ごとに達成過程を振り返り、計画を見直し、変更などを行っていく(Do)。そして、4週間後にどんなことができたか、どのように変わったかを自己評価する(Check)。さらに、その自己評価をもとに、今後どこを改善したり、伸ばしたらよいかからよいか考え、次の目標に生かしていく(Action)。

この間に、グループの仲間がいつも支えてくれているという環境をつくりたい。また、子ども自身がこの目標で取り組むという宣言をすることと、今後の活動のサポートの協力をお願いするために、プロジェクトの計画書を保護者にも目を通してもらう。

4 『プロジェクトカード』の作成

PDCAサイクルとSFAの技法を取り入れながら、土・日も含めて一週間で1枚のプロジェクトカードを作成した(資料編参照)。使用方法は、プログラムに示した通りである。振り返り欄の内容によっては、チャンス相談や呼び出し相談を担任と協力して実施し、活動を支援していく。また、授業実践校では、プログラム終了後の二者面談や三者面談において、担任はこれを資料として活用する。なお、プロジェクトには『プロジェクトH』のように自分の名前の頭文字などをつけて、自分による自分のための計画なのだという気持ちをもてるようにする。

5 授業実践の計画

- (1) 対象 藤岡市立藤岡第一小学校6年生 39名
- (2) 領域 学級活動、領域外の時間(朝の会、帰りの会、休み時間、放課後)
- (3) 実施期間 平成14年9月中旬～11月中旬
- (4) 実施計画

| 研究計画 | 研究者 | 時間 | 学級担任 |
|-----------------|---|------------------------------|-------------------------|
| 9月中旬 | 「将来の夢」や「実現のための努力」のアンケート調査 | 朝の会 | ・アンケートの実施 |
| 9月下旬 | 「自己実現的態度等」の尺度検査の実施 | 学活1 | ・TTでの補助 |
| 10月上旬 | 自己理解のためのSGE 「いいとこさがし」他 | 学活2 | ・TTでの補助 |
| 10月中旬 ～11月中旬 | 目標設定のためのSGE 「なりたい自分ベスト5」他 解決策設定のためのSFA | 学活3 | ・一週間ごとに抽出児のチェック |
| 11月中旬 | 『プロジェクトカード』を用いた実践の指導支援及び記述の変容チェック 評価、改善のためのSGE、SFA 「自己実現的態度等」の尺度検査の実施 保護者へのアンケート | 金曜日の放課後 学活4 帰りの会 宿題 | ・新たな目標への支援 ・アンケートの回収 |

表2 生徒指導プログラム「自分向上プロジェクト」

| 過程 | ねらい | 内容 | 形態 | | 個人・グループの成長 |
|-----------|--|--|----|------|--|
| | | | 個人 | グループ | |
| 計画 (P) | <p><自己理解> 自分の長所・短所やものの見方・考え方などの自己の特性や能力を受け入れる(自己受容)。他者の言葉から自分のよさに気づく。</p> | <p>【朝の会】 「自己実現的態度等」の尺度調査</p> <p>【学級活動】1時間目 自己理解のためのSGE ・ショート「長所のインタビュー」 ・「いいところさがし」</p> | | | これからやることへの期待を抱く。メンバーの相互理解を図る。自分を解放している。 |
| | <p><目標設定と計画立案> 目標が達成できた時の自分の姿をイメージする。(自己実現した姿) 目標達成に向けて、解決策(対策)を考える。</p> | <p>【学級活動】2時間目 目標設定のためのSGE ・ショート「友達から見た私の長所」 ・「なりたい自分ベスト5」</p> <p>【学級活動】3時間目 解決策設定のためのSFA SFAを使って、なりたい自分像をイメージし、各自で解決策を考えてから、グループで話し合い、プロジェクトの計画書を作成する。</p> | | | 自分たちのグループという意識を持ち、目標設定への助言を行う。 |
| 実施 (D) | <p><実行> 自分で立てた計画に従ってプロジェクトを実行することにより、自己実現に向けての主体的な態度を養う。グループの機能を生かして、プロジェクトの実行を促進する。</p> | <p>計画(P)【月曜日の朝の会】 ・新しいカードに今週の目標と解決策、及び士・日の状況を記入する。</p> | | | 自分のよい面を意識する。 |
| | | <p>実行(D) ・計画にしたがって実践を行う。</p> <p>【月～木曜日の帰りの会】 ・その日の達成状況をカードに記入する。</p> <p>評価(C)【金曜日の帰りの会】 ・SFAを使って、この一週間で少しでもできたことを振り返る。 ・相互評価カードでよさを認め合うとともに、次週の目標に迫るように相互に援助を行う。親からも子どもの頑張っている姿を捉え、手紙を渡してもらう。</p> <p>改善(A)【金曜日の帰りの会】 ・グループでの話し合いを参考にして、次週の目標と解決策を考える。 ・カードを回収し、できたことを認める言葉を添えて月曜日の朝子どもに。</p> | | | 肯定的に自分の変化を捉えられるようになる。 メンバー相互の信頼関係ができ激励や助言を行う。自分のよい面を認められ、仲間にも援助を行おうとする。 |
| 評価 (C) | <p><振り返り> 自分で計画を立てて実行したことにより、自分が向上したことに気付く。</p> | <p>【学級活動】25分(4時間目前半) ・SGE「いいところ川柳大会」 ・4週間の自分たちの努力を称え合う。 ・実施期間中のメンバーのよさが発揮されていた場面を振り返り、認め合う。</p> <p>【帰りの会】 ・「自己実現的態度等」の尺度調査 ・保護者へのアンケート</p> | | | より深い相互理解と親密さが増す。人間関係の親密化と主体的な行動への自信を持つ。 |
| 改善 (A) | <p><改善・更新> 今後も自分のよさを発揮したり、自分を向上させたりする目標をもち、継続していけるようにする。</p> | <p>【学級活動】20分(4時間目後半) ・新たな目標をカードに書いて、教室に掲示する。 ・担任は、引き続き子どもの行動を観察し、よさを見つけて認め、励ます。</p> | | | 支持的雰囲気の中で自己をより良く伸ばそうとする。 |

個人 グループ

実践の概要と結果

1 計画 (Plan)

(1) 将来の夢と実現に向けた努力

将来の夢とその実現に向けた努力について調査した。結果は、図3・図4の通りである。「将来つきたい仕事や夢がある」子どもは、「とてもなりたいたいものがある」と「ややなりたいたいものがある」とを合わせると68%となる。それに対して、具体的に夢を実現するために何らかの努力をしている子どもは、「かなりしている」と「ややしている」とを合わせて48%にとどまっている。特に本気でなりたいたいと思ひ、具体的に努力している子どもは10%であり、「将来の夢に向かって努力をしている」子どもは少ないといえる。

(2) 自己受容と自己実現的態度尺度の結果

子どもの「自己受容」と「自己実現的態度」を測りたいと考え、平石(堀監修2001)の作成した尺度を実施した。結果は表4のとおりである。

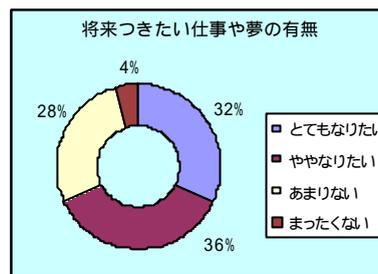


図3 将来の夢

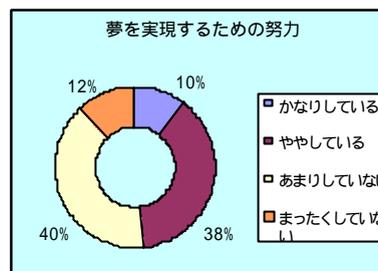


図4 実現に向けた努力

表4 自己受容と自己実現的態度尺度の結果

| 1【自己受容】 | | 平均値 | 全体 |
|------------|---------------------------------|------|-------|
| ア | 自分なりの個性を大切にしている | 3.56 | |
| イ | 私には私なりの人生があっていいと思う | 4.21 | 14.5 |
| ウ | 自分の良いところも悪いところも、ありのままに認めることができる | 3.26 | (3.6) |
| エ | 自分の個性を素直に受け入れている | 3.49 | |
| 2【自己実現的態度】 | | 平均値 | 全体 |
| ア | 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている | 3.23 | |
| イ | 情熱をもって何かに取り組んでいる | 3.05 | |
| ウ | 前向きな姿勢で物事に取り組んでいる | 3.28 | 24.0 |
| エ | 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている | 3.72 | (3.4) |
| オ | 張り合いがあり、やる気が出ている | 3.36 | |
| カ | 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない | 3.62 | |
| キ | 自分には目標というものがない | 3.72 | |

【5段階評価】

- 5：とてもそう思う
- 4：ややそう思う
- 3：どちらともいえない
- 2：あまりそう思わない
- 1：まったくそう思わない

検査の結果から、次のようなことが考えられる。

自己受容では、ウがこの集団として低いことから、自分の悪いところを気にして嫌悪感のようなものを持っている子が多いと思われる。

しかし、自己受容のイが飛び抜けて高いことから、自分自身を否定していない。むしろ、自分なりの幸せな生活を願っているといえる。

自己実現的態度のア～ウが低いことから、自分の夢の実現のために一生懸命取り組んでいる子は少ないと思われる。これは、前述のアンケートの結果(図4)とも一致している。

図5は、自己受容の得点を横軸に、自己実現的態度の得点を縦軸にとり、プロットしてグラフに表したものである。グラフをみると、自己受容については、ほとんどの子どもが3以上の自己評価をしている。しかし、自己実現的態度についてはかなりの多くの子ども

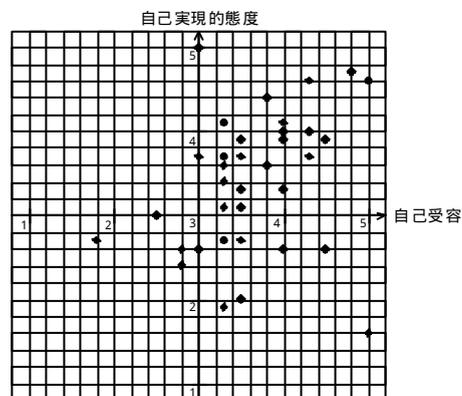


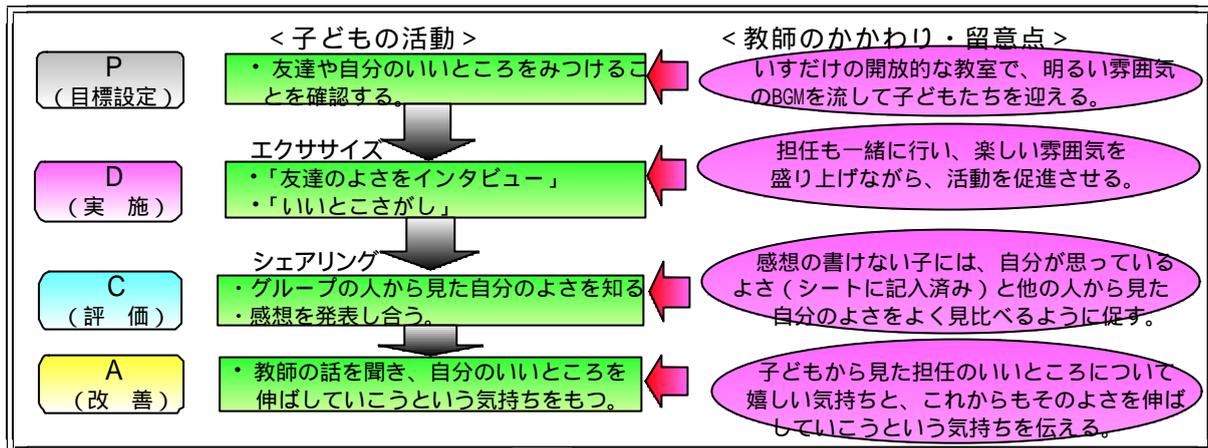
図5 尺度検査のグラフ

が、3以下の低い自己評価をしている。今後、この学級の自己実現的態度を育てていくためには、個々の自己受容の程度に応じて自分なりの目標を持たせ、毎日の実践を積み重ねていくことが重要である。そのためには、各授業における振り返りカードやプロジェクトカードへの言葉かけが大切な教師のかかわりとなってくる。

(3) 授業実践例：1時間目(自己理解のためのS G E)

<ねらい> 互いのよさを認め合う活動をとおして、自己や他者に対する肯定的な見方ができるようにするとともに、支持的・受容的な学級の雰囲気育てる。

<活動内容>



子どもの変容

担任の観察

子どもたちが本当に楽しそうに活動していた。ふだん、あまり自分のことは語ることもなかったが、男女混合のグループをつくったことにより、異性を含めて自分とは違った考え方もつ他者と触れ合えてよかった。

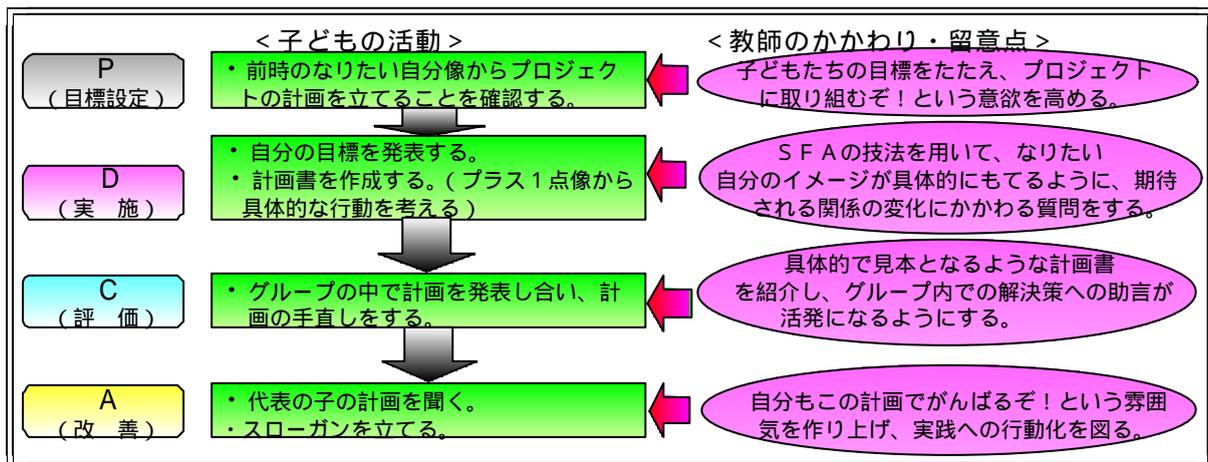
子どもの自己評価(39人中)

| | |
|---------------|-----|
| ア、今日の学習は楽しかった | 34人 |
| イ、新しい自分が発見できた | 36人 |
| ウ、新しい友達が発見できた | 36人 |

(4) 授業実践例：3時間目(解決策設定のためのS F A)

<ねらい> 自分のよさを生かした「なりたい自分」をイメージし、それに近づくための具体的な行動(解決策)を決める。

<活動内容>



子どもの変容

担任の観察

今日のように目を閉じてじっくり考えさせると、子どもの本気で取り組みたいという気持ちが強くなったと思う。プラス1点像を発表した時の表情がよかった。グループでの話し合いも活発になってきて、心配だった子も友達の援助を受けて計画を立てられた。

子どもの自己評価(39人中)

| | |
|-----------------|-----|
| ア、自分なりの目標が立てられた | 34人 |
| イ、自分で解決策が立てられた | 31人 |
| ウ、班の人の意見が参考になった | 22人 |

2 実施 (Do)

<ねらい> プロジェクトカードで毎日の活動の状況を記録しながら、主体的・自律的に自分を向上させる活動を行う。終末の振り返りでSFAの技法を用いて、自己評価を高めていく。(詳細は資料編を参照)

<活動内容> プロジェクトカードを用いて、4週間実践する。友達の努力を認め合いカードに書いて渡す。保護者から自分の努力を認めてもらう手紙をもらう。

* 抽出児として、自分では勉強もそんなにできないし、あまり取り柄もないと思っているA男と、自分の個性を認めているが、自分から進んで何かしようという気持ちになれないというB子の記述とそれに対する研究者の言葉を表5に示す。

表5 研究者のかかわり(プロジェクトカードの記述より抜粋)

| | | | |
|----|--|---|-------------|
| A男 | なりたい自分 | 国語の読みをうまくしたい | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・12日と17日は1回もつかえずに読めた。 ・本を毎日読めた。 | <ul style="list-style-type: none"> → 2日もつかえずに読めたなんてすごい！ → どうしたらできたんだろうね。今度教えて。 → 毎日本が読めたなんてりっぱです。君には決めたことをちゃんとやり通す力があるんだね。 | |
| B子 | なりたい自分 | 英語をもっと覚えたい | だれにでも親切にしたい |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・先週より今週の方が数値が上がってよかった。 ・認め合いカードをもらえてよかった。 | <ul style="list-style-type: none"> → 英語がたくさん覚えられたんですね。英語の何ができたのかな。どうやって覚えられたのかな。 → よかったね！自分のことを見ていてくれる人がいて、カードもくれた人がいるんだものな。親切な気持ちが、さんの中にたくさんあるんだね！ | |

3 評価 (Check) * 詳細は資料編を参照。A男とB子の例を表6に示す。

<ねらい> 自分が向上したり、変わったりしたのは、「なりたい自分」に近づくために、自分自身が主体的に取り組んだ結果であることに気付かせる。

<活動内容> 「いいとこ川柳大会」をする。プロジェクトでできるようになったことをワークシートに記入する。グループの友達の変化に対して、それを認める肯定的な言葉を書き添える。今までと変わったことや変わった理由を書く。

表6 抽出児への友達と研究者のかかわり

| | | |
|---|---|---|
| <p>A男の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・終わりのころは、つかえなかった。 ・文集をあきずに読めた。 | ← | <p>友達からの認め言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つかえずにちゃんと読めて、すごかったよ！ ・つかえなかったり、あきないで読めてすごいと思う。 |
| <p>どうしてそうなった？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトをしているときに、ちょうど国語で読むという所をやっていて、うまくなった。 | ← | <p>研究者の言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・でも、それを勉強してA男君が努力したからだよな。 |
| <p>B子の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前より英語が覚えられた。 ・前より困っている人を助けられるようになった。 | ← | <p>友達からの認め言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・B子は目標たっせいしているよ。 ・B子はやさしいところが特ちょうだね。 |
| <p>どうしてそうなった？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語を覚えるのが楽しいと思えるようになったから。 ・親切にできるようになったから。 | ← | <p>研究者の言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達も認めてるけど、もともと親切なところがあって、そのよさを伸ばせたんだと思うよ。 |

4 改善 (Action) * 詳細は資料編を参照。A男とB子の例を表7に示す。

<ねらい> 今後も自分のよさを発揮したり、自分を向上させたりする目標をもち、継続して取り組んでいけるようにする。

<活動内容> 今の自分を見つめ直したり、自分が置かれている現状を考えたりして、新たな目標を決める。

<事後の活動> 授業後、短冊カードに目標を書き、教室に掲示する。

表7 抽出児の新たな目標

| A 男 | | B 子 | |
|----------|----------------------|--------|----------------------|
| いつまでに | どうする | いつまでに | どうする |
| ミニパスの大会で | 笠懸小と強戸小に勝つ | 卒業までに | 英語をもっと覚える |
| 解決策(案) | スピードをつける パスを正確にする | 解決策(案) | 英語の本を読む 発音を正しく覚える |

研究の結果と考察

1 学級全員の個々の自己実現的態度が高まったか。

プログラム実施後の尺度検査の結果は、表8の通りである。また、図6は実施後の尺度検査のグラフである。ほとんどのプロットが第1象限に集まったことから、自己を受容し、自己実現的態度をもった学級集団へと高まったことが分かる。

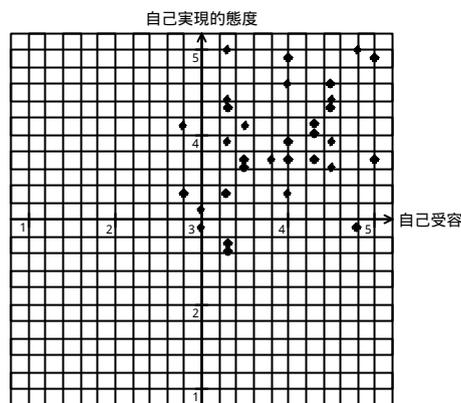


図6 尺度検査のグラフ (実施後)

表8 尺度の平均値

| 自己受容 | 全体 | 自己実現的態度 | | 全体 |
|--------|----------------|---------|--------|----------------|
| ア 3.79 | 15.4 (3.85) | ア 3.67 | オ 3.69 | 26.9 (3.85) |
| イ 4.28 | | イ 3.54 | カ 3.9 | |
| ウ 3.64 | | ウ 3.69 | キ 4.31 | |
| エ 3.69 | | エ 4.15 | | |

図7は、プログラム実施前後の「自己実現的態度」の尺度の平均値を表したものである。自己実現的態度が大きく向上している。担任の観察によれば、自分の興味・関心をテーマにした「卒業論文」への取り組みにも、やる気を感じられるようになったという。プロジェクトカードへの教師の肯定的なかかわりや、変化を支える友達や親からの言葉が良い方向に結び付いたと考える。プログラム終了後も、多くの子どもがプロジェクトカードを使って「なりたい自分」への取り組みを続けたいと担任に申し出て、親しい友達とグループを組んで活動を継続している。

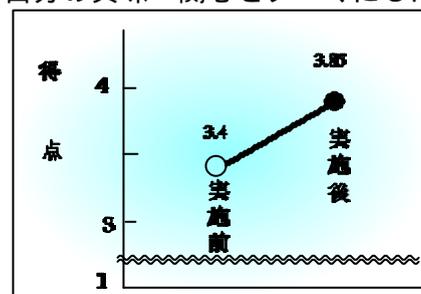


図7 自己実現的態度

2 抽出児の自己実現的態度が高まったか。

(1) 担任の観察から

表9 担任の観察による自己実現的態度の変化

表9は、担任がプログラム実施の前後で行った抽出児の「自己実現的態度」の結果である。

担任の目から見ると、A男は、自分のやりたいことに意欲的に取り組むことが課題であった。実施後はプロジェクトの目標だけでなく、駅伝の選手に選ばれて県大会にも出てみたいという目標を持ち、毎日欠かさず走るようになった。B子は、決められ

| 自己実現的態度 項目 | A 男 | | B 子 | |
|---------------|-----|-----|-----|-----|
| | 実施前 | 実施後 | 実施前 | 実施後 |
| ア 意欲 | 2 | 3 | 2 | 3 |
| イ 取り組み | 3 | 4 | 2 | 3 |
| ウ 前向き | 2 | 3 | 4 | 4 |
| エ 良い面 | 2 | 3 | 3 | 4 |
| オ やる気 | 2 | 3 | 2 | 3 |
| カ やりたいこと | 2 | 4 | 3 | 3 |
| キ 目標 | 3 | 4 | 3 | 3 |

たことについては前向きに取り組めるよさがあるが、自分なりの目標や考えで自発的、自主的に取り組んで欲しいという課題があった。実施後は、自ら家庭での英語学習に励み、英語の学習が楽しくなるとともに、そのことが自信となって他の教科の成績も向上してきたとのことである。実施期間中、子どもだけでなく担任自身も、その子の自己実現に向けて、肯定的によさに注目していこうとする変化もみられるようになった。

(2) 自己評価から

10点満点の自己像に対するスケーリングの変化を見ると下表のようである。

| | スケーリングの変化(数字は週) | | | | | 具体的変容(自己評価の記述から) |
|----|------------------|-----|------------|---|---|--|
| A男 | 始2 | 2.5 | 4 | 5 | 7 | ・国語の時間のとき、すらすら読めるようになった。 ・文集をあきずに読めた。 |
| B子 | 始4 | 7 | 7.5 (目標の1) | | | ・前より英語を覚えられた。 ・前より困っている人を助けられるようになった。 |
| | 始3 | 4.5 | 6 (目標の2) | | | |

2人とも、スケーリングの数値が徐々に上がっており、自分のできたことを肯定的に認め、自己評価が高くなった。その結果、やればできるという思いが強くなってきていると考える。

(3) 自己実現的態度の尺度から

図8は、実施前後の抽出児の尺度を示したものである。2名とも「自己受容」については、ほとんど変化がなかったが、「自己実現的態度」については、大幅に数値が上がっている。特に、「自分の夢をかなえようと意欲に燃えている」「情熱をもって何かに取り組んでいる」「自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている」の三つの項目が大きく向上していた。

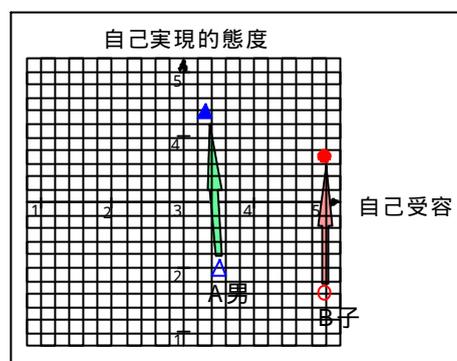


図8 抽出児の尺度変化

(1)~(3)より、抽出児の自己実現的態度は高まったといえる。

3 保護者からみて自己実現的態度は高まったか。

プログラム終了後、保護者にアンケート調査を行った。質問内容は、自分向上プロジェクトの実行中の子どもの様子を以下の ~ のように、自己実現的態度の尺度項目を保護者に分かりやすいように変えて実施した。39名中37名の回答を得て、結果は図9のようになった。

自分の目標をかなえようとする意欲がわいた。
 自分の目標をかなえようとして情熱的に取り組んだ。
 このプロジェクトに前向きな気持ちで取り組んでいた。
 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしていた。
 張り合いが感じられ、やる気がみられた。
 自分が本当にやりたいことが分かってきた。
 自分の目標をもてるようになった。

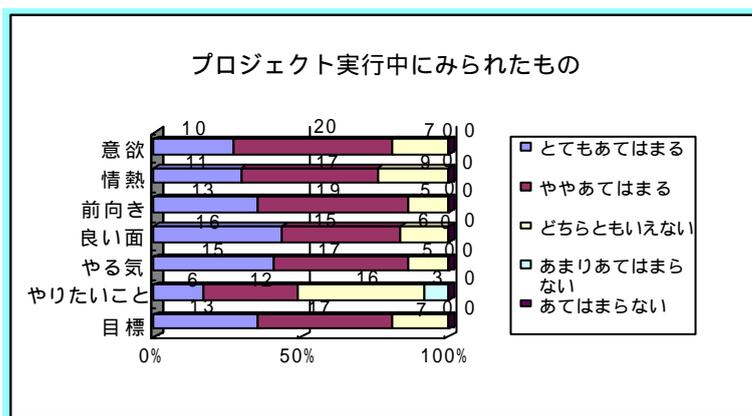


図9 保護者からみた子どもの様子(数字は人数)

調査の結果から、子どもが自分の決めた目標に向かってやる気を出し、前向きに取り組んだ様子がうかがえる。しかし、「自分が本当にやりたいことが分かる」というところまでには至っていないとみている。

また、本プログラムの活動については、図10のように92%の保護者がたいへん良いまたはやや良い活動であると回答している。その理由として、以下のような感想をあげている。活動に否定的な意見はなかった。

一人一人みんな目標が違うことで無理がなく、また個性を認めてもらえて良いと思う。
 マンネリ化した日常生活の中で刺激を与えられた様子で、もう一度自分のすべき事を考える良い機会だった。
 今何をすべきなのかを自分自身で考え、積極的に取り組むようになった。また、集中して時間を使えるようになった。
 目標を立て、それに向かってどのように努力したらよいかということ自分で考えるのは、とても良いと思う。これからもぜひ、このような活動を続けて欲しい。

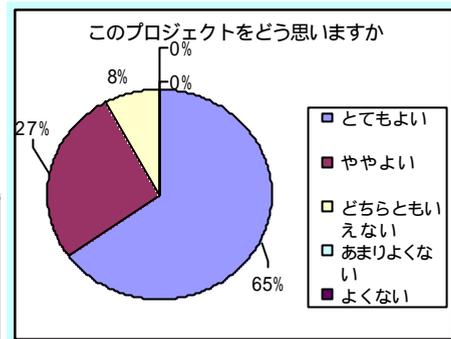


図10 プログラムへの意見

以上1～3の結果から、本プログラムは小学校高学年の子どもに自己実現的態度を育てるのに有効であると考えられる。

研究のまとめと今後の課題

本研究は、子どもの自己実現的態度を育てるための生徒指導プログラムの開発を目指したものである。その手だてとして、PDCAサイクルの中に構成的グループ・エンカウンター(SGE)と解決志向アプローチ(SFA)を用いた。

SGEを用いた授業では、子どもは、ねらい通り自分や周りの友達の新しい一面に気付くことができた。また、SFAを用いたことは、自分の目標に意欲を持たせたり、実現可能な具体的な行動を設定したりするのにたいへん有効であったし、自己評価を高めることもできた。

担任の感想として、子どもたちの変化に本プログラムが有効なものであり、担任が中心となって取り組めば、子どもの実態にあった最適な時期に実施でき、さらに効果的が上がるという意見もあった。

今後の課題として、グループのプラス機能をもっと高めるために、ふだんからグループで話し合う場面を多く設定する必要があると感じた。そうすることで、話し合いが活発になり、自己理解がより深まったり、目標設定や改善の場面で互いにより良い提案ができたりすると考える。また、本プログラムの実施に加えて、教科指導においても、その子なりの良い変化や努力を認めて自己実現的態度を高めていくようなかわり方や評価を取り入れていくことが必要である。

<引用・参考文献>

- ・文部省 『生徒指導資料第20集』(1988)
- ・田中博之監修 『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』ベネッセ文教総研(2001)
- ・堀 洋道監修 『心理測定尺度集』サイエンス社(2001)
- ・谷津 進 『品質管理の実際』日本経済新聞社(1995)
- ・國分 康孝編 『カウンセリング辞典』誠信書房(1990)
- ・山本 銀次 『エンカウンターによる心の教育』東海大学出版会(2001)
- ・國分 康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』図書文化(1996)
- ・國分 康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ編』図書文化(1999)
- ・ディヤング、バーグノ玉真慎子、住谷祐子監訳 『解決のための面接技法』金剛出版(1998)
- ・富永良喜、山中 寛 『動作とイメージによるストレスマネジメント教育(展開編)』北大路書房(1999)